

虚血性心疾患との鑑別に苦慮した左脚ブロックによる心筋メモリーの一例

◎安井 佑季¹⁾、登尾 薫¹⁾、角田 敏明¹⁾、川井 順一¹⁾
地方独立行政法人神戸市民病院機構 神戸市立西神戸医療センター¹⁾

【はじめに】心筋メモリーは心室ペースングや間欠性脚ブロックなど異常な興奮伝導から正常な興奮伝導に回復した際にT波の極性に变化を生じる現象である。その際に観察される陰性T波は虚血性心疾患などのT波変化と類似しており、心電図上での鑑別は困難とされている。今回標準12誘導心電図で虚血性変化との鑑別に苦慮した左脚ブロックによる心筋メモリーの一例を経験したので報告する。

【症例】50代女性。右肘粉碎骨折のため来院。手術前検査として心電図検査を施行。記録開始時、洞調律で心拍数66回/分、四肢誘導Ⅱ、Ⅲ、aVF及び前胸部誘導V1～V4に陰性T波(最大7mm)を認め、1分後に完全左脚ブロックを呈した。胸痛などの症状はなかったが虚血性心疾患やたこつぼ型心筋症などの心疾患を疑い直ちに経胸壁心エコー検査を施行。左室駆出率は55%、完全左脚ブロックによる歪な壁運動を認めたが、他に緊急を要する心疾患を積極的に疑う所見は得られなかった。冠危険因子はなく、血液検査で心筋逸脱酵素の上昇も認めず。心電図検査から3時間後に冠動脈CT検査も施行したが冠動脈は3枝とも有意な狭

窄を認めず、心筋虚血は否定的であるためT波変化は心筋メモリーによるものと判断した。

【考察】本症例では陰性T波と左脚ブロックへの心電図変化を観察したことに加えて虚血性心疾患を問診や他検査により否定することができたため、最終的に左脚ブロックによる心筋メモリーが陰性T波の原因であるという判断に至った。陰性T波は深さが5mm以上の場合に心筋虚血や器質的異常を疑う有意な所見とされており、観察されるT波変化が心筋メモリーによるものか症例ごとに判断が必要となる。また左脚ブロックは背景に心疾患を有することが多く、特に徐脈依存性の場合にその可能性が高いとされている。本症例の場合は手術前の心電図検査で観察されたT波変化であったため、周術期管理の目的で心疾患の有無を精査する必要性は高かったと考える。

【結語】心筋メモリーは心電図のみで緊急性の高い虚血性心疾患と鑑別することが困難なため、状況に応じて精査を行う必要があると考える。

連絡先：078-993-3776（内線4331）